將のことであるから、日本の現在の立物から將來を始終考へて居られたに違いない。

●日本の今日は、軍備擴張と言ふ問題が始終內閣變動の原因をなして居る。これには實際深い理由のあることゝ思はれるが、諸君今若し暴力を以て徒に戰を需めるものが世界の强國のうちに出來たら、日本は戰を好まぬと言つても向ふから武器を以てやつて來れば坐して居るわけには行かない。

●二十世紀の戰爭は實に空中戰の時代である。今歐洲の天地では空中戰をやつて居る。地には自動車と自轉車が戰場の大武器となつて居る。見給へ歐洲戰爭の發展の早いことを。まるで自動車旅行のやうである。

●歐洲戰爭の結果、今後戰爭學は著しい速度を以て發展するであらう。國防上日本は東洋の英國に比することが出來る。歐洲の英國は今生死の關門に在つて苦んで居るでは無いか。世界征服魂を有する戰王が世に在りとすれば戰備の擴張は自國の防禦上まぬがれぬ處である。日本も國防の上には大發展が居る。空中戰備の時代である。

●話は元に戻らねばならぬ。僕が『努力を要す』と言ふのは此點である。世界の表に立つて恥しからぬやうに、否堂々たるものとならねばならぬと言ふことは、日本人の持つべき抱負であらう。この道は二つしか無い。一つは平和の戰爭に勝つこと、二つには武器を以てする戰爭に勝つこと。道は簡單でも遂行するには骨が折れる。平和の戰爭に勝つことは文明の向上と國民精神の發展である。日本人は『島國根生』より『大陸根生』に渉らねばならぬ。世界的になるには世界の智識と世界的精神が要る。この方面には日本人が大に努力して進步發展せねばならぬ。見給へ亞米利加へ日本人が少し許り移住すると排日の運動をやらるるではないか。例へば獨逸人を見給へ。世界の表上に發展することに極めて巧である。

●國民精神の發展は言ひ換ふると國民の道德性とも稱へ得らるゝであらう。これが一段と進まねばならぬ。

●僕は思ふ。東洋の英國たる日本は、歐洲の英國の今日の狀態に近いやうな運命を持

たねばならぬことが來るかも知れぬ。大方來るだらう。否な來るに極つて居るかも知れぬ。軍備も出來る限り擴張することは止むを得ぬと思はるる。

●諸君！　僕は極簡單に歐洲訣別記を書くつもりで筆を執り始め、折柄戰爭熱にあつくなつて居るので何だか妙な方へ手が延びて、思はず長くなつてしまつた。言ひたいことは　だ少しも盡じないがこれ以上に書いては餘り長すぎる。卽ち筆を擱く。

第三編　途上の巻

千九百十四年八月の末つかた、英京倫敦を出發し、印度洋を經て祖國に歸る船中にて認めたるものゝ一部分を集めてこの編を作る。

日本人種改良論

近頃日本では第三帝國を主張する人が出來たと聞いて居る。第一及び第二帝國をみくびつて第三帝國を主張するなら第四、第五帝國を主張する要あり。併し第三帝國を主張して理想的のものとするには、矢張第一及び第二帝國から改良をして行かねばならぬ。

僕は右の意味に於て、どうしても今日は日本人種を改良せねばならぬと思ふ。僕は日本に生れて愛國的の敎育を受けた生粹の日本人である。日本人を惡く解釋致したくないことは勿論である。處が實際考へて見ると實に悲觀せざるを得ない事柄を多く發見する。

僕は今日本の精神文明を別にして暫らく身體のことだけに就て聊か述べて見やうと思ふ。

日本人の體格が歐洲人のそれに比して劣つて居ることは爭はれぬ事實である。これは實に殘念である。身體が弱くては戰爭をしてまけることは自然の數である。獨逸などでは、最近婦人の職業は著しく增加したるに拘らず、平均壽命は五十五歲にも達したと云ふではないか。男子とても矢張平均壽命が昔より延びて來た。これは衞生上の進歩と社會的設備がよく整つて居るからである。一例を擧げて見ると疾病金庫の如きこれなり。

どうです。日本の狀態は、工業の進んだ結果、女工の數は著しく增して來た。處が多くの工場はこゝに集まる女工を結核に罹らせて殺しつゝある有樣である。其食事と言ひ、其住居と言ひ、其休養の方法と言ひ、衞生上の原則に反して居ると言ふことである。政府も手をつけず、工場主も人を殺して何とも思はず。何と慘憺たる樣ではな

いか。

殿洲の文明國では、結核の數が減少しつゝあるのに、日本はこれと反對に、段々增加の傾きあり。結核は國民病である。これが猖獗に國民を斃しては溜らぬではないか。人種改良を論ずるに當り、第一研究を要することは、何故日本人種が劣つて居るかを知ることであらう。これを知るには、現在日本人の行ひつゝある衣食住の狀態を研究することである。

日本人の衣食住の方法が人間生活の條件に合して居るや否やは今日まで十分に研究されて居ない。僕の考では從來の組織を餘程改良せねばならぬと思ふ。一寸早い例が、日本の婦人を見給へ此調子では人種改良などと言ふことは中々六かしい。第一日本の婦人は運動と云ふことをてんで顧みぬ。顧みぬのではない。恐らく出來ないのであらう。僕は婦人尊重論者である。それだから婦人を侮辱して惡まれ口をきくものと思つて貰つては少々困る。尊敬する日本の御婦人方に御相談を致すのである。

日本の婦人は、小足で、内輪でチョコ〳〵とお歩きになる。出來るならもつと歩調を大きくして歩いて貰ひ度い。西洋の女のやうに男などは追ひ越して行く程に歩いて貰ひ度い。西洋の婦人は旅行用具、例へば洗濯物、食用品、其他使用の品々を袋に入れて兵隊の背嚢をつけたやうにして山昇などを致します。危險を犯してまでもやります。水泳ぎをします、馬に乘ります。橇に乘ります。ボートをこぎます。これは身體にそれだけはげしい運動をする餘裕があるからです。日本婦人にはその餘裕がありませぬ。時間の餘裕も造れないし、またそんなことをしては、身體が第一參つてしまひます。西洋人などにまけて居ては殘念ではありませぬか。實は我等男子は日本婦人を有せることを誇りと致したのです。——出來ることなら——

日本の婦人が早老することも、有名な事實です。恐らく身體を早く代なしにするからでせう。

日本人種改良を實行するには、第一生活法を改良致さねばなりませぬ。今日の生活

法には隨分不衞生なことがあります。御覽なさい。日本の婦人は足を痛めてまでも、キチンと坐ることを以て行義の正しいものと考へて御出でになります。斯くして足を內輪にして歩かねばならぬやうに曲げてしまふのです。そして外輪に歩くと可笑しと言つて笑ふのです。

婦人の着物もこれではいけませぬ。日本婦人のうちに何故衣服改良の爲めに卒先して盡力する人が出ないのでせう。衞生上の缺典は明白なことです。經濟上の不便も御婦人自ら解つてゐる筈です。實用に適しないことも論なきところでせう。僕は直に西洋の婦人服を輸入せよとは申しませぬ。が併し、日本從來の婦人服を改良する餘地はいくらでもあると信じます。

日本の婦人が遊戲と體育に無頓着なることは、一寸不思議な程です。これでは體格などの改良は迚も出來ませぬ。斯く申すと、日本の婦人は、そんな遊ぶ時間がないと言はれます。サアそこが議論のある點です。時間が無ければ、時間を造ればよいでは

ありませんか。

歐洲に於ける生活の劇しいことは、迚も日本などの比ではありませぬ。日本の婦人は、西洋人が五分十分で濟ます用事に尚ほよく三十分、一時間と言ふ續いた時間を捧に振つて平氣です。朝から晩までお働きになります。日曜と云つても休める人は至つて少ない。日本の女中などゝ毎日曜に休むなど云ふことは出來ませぬ。皆さま議論は茲です。時間の用ゐ方が西洋人よりも日本婦人の方がまづいのです。これは確な事實です。實際のことを見ますと其兩者の模樣を比較することが出來ます。人種改良を叫ぶのは、論を好む爲めではありませぬ。迚も此外に途が無いからです。永く泰西を見て居ると日本人の缺典が痛切に解ります。私は『累卵の日本』と形容されても今日の調子では否認出來ぬと存じます。日本人種改良は、今日日本の全國民が心血を注いで企てるべき事業であると深く確信して毫も疑はないのであります。

日本人は經濟の念に乏し

日本では物を買つて小釣錢を受くる場合其儘に捨て置きにするものあり。それが却つて上品だと見らるゝ如き風あり。西洋などではこんなことは決して無し。料理店などでも釣錢は少額と雖も之を檢して受とり其中より別に相當の祝儀を與ふる風にすれど、日本人は僅かであればこれを祝儀の意味にて其儘にして捨置く風あり。可なり多くの釣錢をとる場合などでもこれを改めずして其儘金着に收むるの風あり。西洋にては斯かること決して無し。馴れたる西洋人などは既に日本人の此缺典を知つて居る。獨逸などでは度々聽く處である、例へば商店などの會計部で釣錢を渡す場合に例の逆勘定を速にやつて居る間に日本人は日本式の差引勘定をなし、例へば三圓七十五錢のものを買つて五圓で釣を取る場合一圓二十五錢と言ふことを知り、何でも一圓の外に二十錢前後位あればそれでよいとしていかにも解り顏をして受取るのだ。之は全く日

本人の自白である。鞘工場や其他の商店の會計部には女子の居るのが普通である。この女子の中にはこんなことをチャンと知つてゐると見える。此法で旨い味を覺えたのかも知れぬ。釣錢を手早く數へて一馬克位少く出す、此一馬克はチャンと他の手に持つて居て、相手が數へずに直ぐ摑んでしまへば、一馬克はその娘の小遣になる。後で舌を出して野呂間な人間だと笑つて居るかも知れぬ。若し相手が俄に手を著けず、釣錢を眺めて勘定をして居る場合には、別の手に持ちし一馬克を素早く出して先方に無謀を感ずかせずにする。そのやり方の早き驚くべし。驛の様な處でも無論油斷はならぬ。

こんな横着なやり方は經濟が發達して居る證據では無い。何は兎もあれ、歐洲で既に斯の如し。支那などゝ來ては、ソレは話にならぬ。印度洋を經て歐洲に行きしものは誰でも經驗して居る。僞金をつかませる。兩替で無謀の口錢をとる。酒手の請求、着港して町を見物する場合客の金をしぼらんとする惡漢どもの多いには困る。

話は横道に入つてた、舞戻る。

日本人は時として初めに價を聞くのに間が惡いなどゝ思ふ癖がある。後には飛んでもない目に逢ふ。コロンボで僕は理髮店に這入つた。髮を刈らせた。理髮店に行つて理髮賃を最初尋ねるなどゝ言ふことは一寸キマリが惡いと例の日本根生を出して其儘に刈らせた。處が僕は一人の友人から理髮の失策を聞いて居た。其友人は獨逸に著した當時理髮屋に投じた。理髮師曰く『貴殿の髭は手入を要します』友人曰く『イヤー』(イヤーとは英語のエースに當る)『毛髮に藥をつけませうか』『イヤー』『イヤー』『美顏術を施しませうか』『イヤー』『イヤー』『日く何』『イヤー』『イヤー』と、悉く先方の注文通りを行はせた。先方は得たりかしこしと種々と勿體をつけて何や觸とやつた。歸りに理髮賃をと問へば驚く勿れ十馬克五十『フエンニヒ』、友人は吃驚して口を開けたまゝ二六十二時間茫然たりであつたと言ふ。

そこで僕も一寸そんな事を思出した、殊にコロンボは旅客をのみ相手にして居る場

所柄でもあるから、成る丈け單簡に行はせやうと考へた、藥もつけるな、髪を洗ふ必要も無いと命じた。處が驚く勿れ、一圓三十錢程もとられた。

日本人は又下宿屋などの差出す書付の細目を見通さずして總計を見、月の末に勘定して下宿の主に渡す習慣あり。日本人を永く家に置いて日本人の性質を知り拔けるものは二重の勘定などを書いて居ることがある。故意と思はれるやうな事も少くは無い。時には一寸初めに試驗的にやつて見る、若し例の如く總計丈けを見て勘定拂をする人であれば、始終此手で胡魔化しをやつて居る。僕は少からずこんな事實を發見した。

處が西洋人は決して斯かることはせぬ、假令五厘でも一錢でも不審があればあくまでも詰問する。先方でも心よくこれを說明する。

西洋に居て日本人などゝ共に旅行をするより西洋人と行る方が經濟的にあがる。僅少の金で多大の功果を望むのが經濟の原則と言ひ得るならば、日本人は餘程經濟に迂なる國民かも知れぬ。日本人は金のことを言ふのはキマリが惡いやうに思ふ習慣あり。

大ザッパにウーン〳〵と言つてやりッ放しにして置けば豪傑肌だなどゝ言ふ癖あり。西洋では花嫁の持參金の額などを豫め其親に尋合すことあり。勿論失禮にも當らずと言ふ。

僕の倫敦にて講演をなさんとするや。先づ『講演價』なるものを僕に聞く。曰く『一回幾千なり』、『然らば願はん』と言ふ有樣なり。日本ならば謝禮として紙に封じ、水引でもかけて、其上に『薄謝』などゝ示して講演主に渡すなり。西洋では講演者に人の前でも、一向頓着なしに『講演料を』とて、手に摑んで金を渡すなり。若くば同じ倫敦中に居乍ら爲替券や、郵便切手などを混じて定額を造り。演說料領收證まで添えてそのサインを求むるなり。日本ならば使に持たせてやる處なり。東西其式を一にせざる、以て察することが出來る。

經濟觀念の發達は恐らく『生活苦』の結果であらう。日本の樣に貧乏國の民は上手に經濟を行つてゆくことを學ばねばならぬ。獨逸人の如きは、實に勤儉貯蓄の民であ

る。今日の富は、この精神に基く產物であらう。

歐洲觀

局部の觀察、西洋に留學せる日本人にして、西洋に關する一般智識の乏しきは事實である。これ留學生の對象とするところが學校、學位、書籍等の範圍を出でざるがためである。此等のものを對象とするはよし、然れども更に社會其物に就て研究することは何れの學科を專攻せる人にも日本人としては必要のことである。これ素より容易のことにあらず。然れども注意するによりて自ら知るところも廣くなるなり。新聞を讀まず、善良の社會の人々と交らず。西洋に來れる日本人自己にして斯の如し。西洋に於ける生活の眞相が日本に明かに解せられざる所以である。

風俗習慣の原因。西洋の風俗習慣が日本のそれに比して大に其趣を異にせるは事實である。日本人の中には一も二もなく、西洋の風俗と習慣にかぶれるものあり。之に

反對に頭から足の先きまで西洋嫌ひの人あり。兩者とも西洋の眞生活を窺ふ能はざるは一なり。一の風俗と習慣が國民の間に固着するには、國民の性格と相合ふ處がなければならぬ。歴史を捨て、國民の性格を外にして只現在の風俗習慣のみを見て彼は善し、此は惡しと評するだけにてはあまりに興味少し。何故に此習慣が發達せしや。何故に此風俗を社會より去り能はざるか。風俗と習慣は、蓋し社會生活の眞相を物語るに極めて詳なるものあり。日本人が西洋の社會を見ることに暗きは殘念なり。

日本人は交際の術に巧ならず。日本の社交は、西洋に比すればその趣大に異り、發達の度も及ばず、其結果、日本人は西洋の人に比して社交の話柄に窮すること多し。西洋にては既に小兒の時より他人に應接の機多き結果、他人と談話することに慣せり。日本の婦人なども隨分訪問に多くの時間を費して、四方山の話などなし玉へど、一度西洋人に接すれば、「エース」と「ノウー」の持ち切りにて更に意見を吐かず。西洋人は言ふ、東洋人には秘密あり、眞を明さず、これ相交りて親密となり難き所以なりと。

西洋の人は公開の席上などにて『我妻は、斯くなせり、我妻は斯く言へり』などゝ言ひて我妻に關して話しなど平氣ですることなり。日本人が若し斯くの如くせば『お惚氣は御免蒙りたい』と來るなり。それ故遂『愚妻』などと言つて見るなり。西洋にては『我最愛の妻』と言はるゝところである。萬事斯の如し。西洋人は言ふ、大陸の國民は島國根生を有せず、島國根生は「秘密」、「猜疑」、曰く何、曰く何なりと。

話柄に長せざる日本人は、西洋人との交際が一層面倒になるなり。西洋に在る日本料理店などにて邦人と交る場合には舌端火を吐いて議論する人も、西洋人の前では沈默して眠れる猫の如くなるなり。「イヤー」若しくは「ナイン」丈けでは先方の相手にも張合なし、遂に『貴殿の意見は如何ですか』と意見を求めに來るなり。『ソーですネ、それは貴殿のお考になる通りでせう』位で胡魔化してしまうなり。勿論これには會話の難きにもよるべけれど、社交を臆劫がる結果、會話も上手にならず、社會の眞相を窺ふ機會を取り外すこと多し。單に珈琲店と下宿屋とを材料にとりて、泰西の社會生

活を論せんとするものあるに到つてはその大膽も亦あまりに度を失せずや。

社會は活書なり。日本の教育法は、『教科書による教育法』なり。『暗誦教育法』なり。『筆記的教育法』なり。六ケしき外國語の教科書を暗誦し得るも、而かも外國語にて單簡なる日用の書面をだに書き得ず、容易なる挨拶をも碌々なし得ず。近頃新聞記者の募集に應じて大臣の名さへ滿足に列擧し能はざりしもの甚だ多く、其中には大學出の人も相應にありしなど言ふ記事邦文新聞に見えたり。日本の教育が『常識的』ならざる凡そ察すべきである。泰西にても斯かる例はなきにあらねど、其教育方法は、日本の如く拙からず、『實物的教育』なり。『應用的教育』なり。『非暗誦的教育』なり。『非筆記的教育』なり。

日本人が上記の日本教育を受けたる結果、事物を研究するに書物と講義の外に途なしと考へたがる癖あり。成る程學科のあるものは斯かるものもあるべし。泰西に來りて泰西の社會を見んとするものは、書物よりも講義よりも社會そのものが研究の實證

である。これが活きたる書物である。活きたる材料である。書物と講義は參考たるに過ぎぬ。書物と講義によりて社會問題を研究する不可ならず、然れども書物と講義には幾分人工的のところあり。赤裸々の社會其ものを見ればその方が眞を示せること遙に多く、またそれが近道なり。一種の專門學者が自己の專攻學にあらざる泰西の社會を研究すべきために多くの時間と費用を犧牲にすることは勿論不利益なるべし。然れども隣家たると、法律家たると商家たるとを問はず、苟も泰西に在る以上は、凡そ一般に泰西の社會を出來得る限り眞面目に觀察したしと言ふ興味を持つべきにあらずや。これ實に一個の日本人として有用の義務とも思はる。

泰西の女。日本人のうちには、西洋の女があまり威張り散らすので癪にさわるとつよくものあり。西洋の女が威張りて惡ければ日本の女が柔順と盲從との區別を知らず、權利と義務の別を辨へず、『自覺』の何たるを知らざるが如きもあまり賞めた話にあらず。日本人が見て『所謂威張れる女』は、泰西の世間が生んだのである。泰西の人が

見て、『所謂奴隷』と見做す日本の婦人は、日本社會の産物にあらずや。その因つて來るところの理は兩者共に明である。日本の女が西洋に行き、西洋の女が日本に來て、社會生活をなさんには、當該國の社會に適應するを要す。然らざれば其存在を許されず。これ熱帶地方に生れて裸體生活をなせしものが寒國に移りて、厚き衣服を纏ふの要あるが如し。

泰西の婦人が朝改暮變の流行を追ひ、家庭生活の外に尙ほ社交生活を重んじ。よく話し、よく酒を飲み、よく戲れ、よく謳ひ、よく遊ぶことも、みな社會より授けられし賜なり。婦人自己が持つて生れた性質にあらず。

日本にも近頃『新らしき女』と言ふもの生れたりと言ふ。眞性の意味に於ける新らしき女ならば大に賀すべしだと思ふ。新らしき女は女性より生れざるべからず。然れども此女性は社會自らが產まねばならぬ。社會若しこれを許さずば、千百の新らしき女出づとも、『新らしき女』として存在を認められず。『自覺せる女』を生まんには先づ

日本の社會其ものが其準備をせねばならぬ。蓋し牡丹餅は天の一方より降り來るものにあらず。

日本に關する書籍。泰西に永く居れば泰西人の手になりし日本に關する書籍を見る機會多し、其中には隨分ヒドキものもあれど日本人ながらに驚くほどに微細のことに渉れるものあり。西洋人が日本の社會生活其他を學ぶの難きは日本人が泰西に行きて西洋のそれを學ぶの難きよりも尙ほ甚だしきものあり。日本のうちには西洋の書籍、新聞、雜誌を讀み居ること、西洋人が日本のそれを讀み得る程に難からず。言語も幾分その傾きあり。而して尙ほよく驚く程の緻密なる研究をなせるなり。その根氣の强きこと以て學ぶべきではないか。

西洋は實物教育なり。日本の上流の子供にて通用の銅貨などを今も尙ほ知らぬものありと言ふ。迂遠も亦甚だしからずや。日本にては小兒に金を持たせて物を買はせることなど中流以上の家庭にて避くる傾ありと言ふことである。西洋の小兒は、幼少に

して既に通貨の種類を教へられ、物品の賣買、金錢の勘定など實物若しくは實物と同じく造られたるものを用ひて練習せるなり。學校などにても教へらるゝなり。これは只其一例に過ぎず。西洋はすべての教育法がこの式である。日本には米がどうして出來るかを知らぬ小兒東京などに多しと言ふ、以て其日常生活にかけ離れたる教育法を得べきでないか。

實物教育を主とせる西洋にては、この目的にて建てられたる博物館少からず。倫敦などにも多數の博物館あり。僕は獨逸内地を旅行して無數の博物館を見たり。例へば機械を一々説明したる外に觀客自己が手にとりて運轉して見ることの出來るやうになつて居るが如き、國民の實物教育に重きを置けることを見るではないか。泰西の人々が常識に富めるはこのためである。

僕嘗て匈利牙のブタペストより維也納に歸らんとする汽車の途中、多數の小學の生徒の乘れるに逢ふ。生徒子に求むるに日本の新聞を見たし。日本の切手を手に入れた

し。貴殿に持ち合せはなきや、日本の假名は幾字ありやと、日本にては鼻たれ小僧の年輩なるに既に此注文をなす。且予に『日本語を少し話して見て下され』、『獨逸語のGuten Tog とは日本語で何と申しますか』とそのませたる事驚くべからずや。日本の教育法が應用教育となり。實物教育となり。常識的教育となるに非れば日本人は矢張り西洋人の先に越して行くこと能はず。

泰西の小兒。日本の小兒は知らぬ人を見れば耻かしがりて逃げて行くなり。西洋の小兒は走つて來て他人に應接するなり。日本にては『お客樣があるから彼所へお出で』と言ふ處を泰西にては『お客樣があるから此所へ來て挨拶をおし』と出て來るなり。他人に應接するの術は既に舌の廻らぬ時から學び、喜びを現して人の唇にキッスを與ふることなども搖籃の時代より習ふなり。予は小兒を愛するものから、幼兒より乳臭の接吻を幾度となく頂戴せしことあり。

泰西にては物品の贈與日本の如く無意味に渉りてまでも行はれず。日本の如く手土

産など言ふものを見ず、親子と雖も故なくて物を贈らず。小兒も故なくて他人より品物を受くる能はざるを知つて居る。故なくて他人より物を受けると先づ其理由を聞くのである。之に反し勞力に對しては必ず相當の報酬を受くべきものと考へて居るから其場合には遠慮などせずして直に受取るのである。又何か特に小兒の欲しいものがあれば小兒の方から交換問題を持ち出すのである。

泰西にては又個人の區別甚だ嚴格なり。小兒などに物品を送りし場合、親は別に禮を曰はず、小兒をして言はしむるのである。自他の區別既に斯の如し。金錢財寶に對しては親子相爭ふことの稀ならざる泰西にては當然のことである。

結婚は勝利者の如し。泰西にては婦人の數、男子のそれに優る國多し。全部の男子が一人宛の婦人を持つにしても、その選に洩るゝ女子が出來る。然るに泰西には、結婚を避忌する男子多し。避忌せざるまでも生活難の爲めに止むを得ず、獨身を通さねばならぬに至るのである。茲に於てか獨身の女子は愈多くなるのである。日本にては

『娘一人に婿八人』と言ふ。泰西にては『息子一人に嫁八人』と言ふ姿である。結婚候補者の女子にして、その目的を達し能はざる人の多き、以て察すべきである。既にして愈々將來の夫たる人を得たる場合には、結婚競爭裡の女子にあつては一個の勝利者である。其得意は面に畫かるゝのみならず。人前にそれを吹聽するのである。曰く『私は婚約の身です、夫は人好きよき高尚の人格を有し、音樂、文學などにも興味を有せる人ですよ』、『愈家を持てば、斯うも仕ませう、彼うも致しませう』、『夫は財產家です、人望家です、その上に根が深切なんですもの』、曰く……、曰く……人に見せびらかして他の羨慕を買はんとするうちには、必私に多大の誇りを有せるのである。如何に結婚の難事なるかを察すべし。

泰西の女は、結婚を第一の境界線とす。結婚するまでは一生懸命で働けども、結婚の後には相樂しまんことを望む。結婚して初めて『ヤレ〳〵これで樂が出來る』と喜ぶのである。結婚は勝を誇る軍人にも似たり。

男女の交際、泰西にては男女の交際自由なりと言ふ。これは主として未婚の男女に限るので、結婚後は中々窮屈なものなり。細君の夫を取締ること監獄吏の囚人を監するにも似たり。公開の場所例へば夜會等社交的場所へは勿論、芝居にも音樂會にも必ず先づ夫と同道して他の婦人と親しく相語り合ふ等の機を與へぬやうにするのである。若し疑はしき場合あらば、細君は檢事然として夫の罪跡有無を檢するのである。其見幕は實に恐ろしいものである。『女に角が生える』とは蓋しこの時なるべし。若し未婚の女子と散歩でも仕樣ものならそれこそ大變である。夫が二年も三年も旅行でも仕樣ものなら、細君は安閑として家に留守居をなすが如きことなし。西洋婦人が、旅行をなすには夫を伴ふことを常とす。これ夫を監督せんが爲めである。家に居ては安心が出來ぬなり。夫も亦若き妻を家に殘して旅に出るなど頗る不用心なれば、イッソ夫婦連れで出て行く方が結局確實なりと言ふに基く、東西習慣の異れる察すべきではないか。

結婚の條件。泰西にては結婚の條件として、夫となる人に小兒を多く生ませざるを以てす。これ個人主義なるが爲めなり。現在の幸福を主とするが爲めである。『多く子を生む機械となる程なら結婚は止めにする』と言ひ出すなり。日本の家族主義など泰西人は、夢の如くに思つて居るなり。避妊法の上下社會を通じて浸隱せる敢て審しむに足らぬことである。

婦人は頭を下げず。泰西の婦人は、男の前に來て決して腰を曲げ、首を垂れて禮するが如きことなし。獨逸にては、男先づ帽を脫して禮し、初めて婦人一瞥を下す。これが婦人の禮なり。女より禮を始むることあり。概して言へば泰西の女子は男子の前ならず、女子も男子より先きに禮することあり。英國にては、此規則それ程嚴にペコ〳〵と頭を下ぐることをなさず。ペコ〳〵は男子が行ふことなり。此風は幼少の頃より既に日常生活の間に教へ込まれ、幼童にして既に婦人の手に接吻をなして挨拶するものあり。人は稱して家庭に於ける小兒の仕込方が善いと賞むるのである。

男子は婦人の前にて帽を脱し頭を垂れて挨拶をすれど、婦人は其儘にて一寸うなすくか、手を握る位が關の山なり。泰西にては握手にも一の方式あり。男子先づ手を出すことなく婦人の手を出すに逢つて男子初めて手を出し、然る後婦人の手に接吻を與ふるのである。この接吻は素より一定の場合に限らる。例へば目上の人、若しまた目上の人ならずとも、永く相逢はざりし場合、若しくは特に先方を尊敬する場合等に用ひらるゝのである、親子、親族、親友などの間には手接吻より進んだる唇接吻を交換するのである。日本人が只頭をペコ〳〵下げるのみにて、相手の手を握らず、接吻をもなさず。如何にして愛情を發表し得べきやと泰西の人は審るのである。洋の東西その趣を異にせる甚だしと言ふべきではないか。

隣家の人を知らず。東京などにては移轉の際、向ふ三軒、兩隣りへ蕎麥などを送りて『何分宜しく』と述ぶる例あり。斯くの如くなれば隣り又は向側には凡そドンナ人が住んで居るか位は少くとも解るなり。然れども泰西にては斯かる事無し。隣りに住

める人の何人なるか又何と稱すべきかをすら知らざるもの多し。獨逸、澳多利などにては主人の名は家の門前に掲げらるゝを通則とすれども、倫敦などにては然らず。只家の番號を知るのみにて名を掲げざるもの甚だ多し。商店の如きものは勿論名を掲げたれども、通常の住宅を探す場合は頗る不便なり。門の鈴を押して取次を乞ふ、何々様は此方ですかと念を押して後初めて確實なることが解るなり。英國人が此不便を改めざる保守の精神は凡て斯かるものである。

鍵を要する泰西の生活。泰西にては鍵なくして暮すこと能はず。日本の所謂簞笥、長持の類は申すまでもなく、厨にても、便所にても、物置にても悉く鍵を要するなり。幾ら少くとも五個か六個の鍵は何人も始終携帶して居るなり。室にも室に附屬の鍵ありて來るものは先づ戸を叩きて内より開けて貰はざるべからず。よし鍵の掛けてなき場合と雖も。日本の如く障子や襖を開けて而して後始めて言葉を掛けるなど言ふこ

とは絶對的になし。

日本の家屋は開放主義なり。西洋には迚も想像がつかぬ位なり。西洋人は自他の區別極めて嚴格なり。而して自家のものは出來るだけ堅固にして保存するのである。夫婦と雖も各鍵を存して所有物を保管するのである。

日本人は鍵持つ習慣に馴れざれば、西洋に來ても矢張り鍵など机の引出に投げ込み置くものあり。外出して夜晩く歸り來り、初めて家の鍵を忘れたるに心附き、鍵なくて家に入るの方法なき爲め、致方なく「ホテール」に一夜を明して後家に歸りしもの少からずと聞く。日本ならば門の戸を叩けばそれにて十分なり。叩き能はずは、聲を舉げても可なり。然れども泰西の如く高樓に住めるもの多く、且〆り切りたる家にありては、叫んだとて迚も家の中には其聲が屆かず、況んや夜中をや。

泰西の家庭は鍵と鍵にて區劃せるなり。內より鍵にて閉ぢたる妻の室も夫は妻の許可なくて入ること能はず。小兒の室も亦然り。泰西の家屋は鍵にて多數の小天地を區

畫するのである。この故に若き男女は相互にその住へる家に訪ふことを得ざるを常とす。下宿屋などにて男女の會合を許されざる之が爲めなり。故に彼等は屋外にて相逢ふなり。公園の如き、勸工場の如き、芝居の如き、寄居の如き、「カッフエー」の如き、何れも男女の會合場所ならざるはなし。

泰西にては街上、公園等にて初めて男女相知り、打ち連れて散步し料理屋に行き、芝居見をするなどのことは普通のことなり。會合の場所は家にあらずして屋外にあり。これ西洋の家屋が各個の室を別天地とし得るように區畫したる結果である。

作詩よりも謳歌。日本人には三十一文字などに弄する人甚だ多けれども聲を擧げて歌ふ人は甚だ少し。假令また歌ふにしても合唱に適せず。日本には家庭音樂など言ふもの殆んどなきにあらずや。日本固有の音樂にして家族一同が相集りて合唱など行ふに便利なる樂器果してありや。集會の席上などにて歌はるゝもの『君が代』の外に殆んどなし。泰西にありては日本人の如く短冊などに詩歌を認むるなど言ふことは少し。

作るよりも歌ふ國民なり。泰西には國民歌なるものあり。其數も種類も極めて多し。斯かる詩歌は何人もよく暗誦し居りて機會ある毎に謳ふのである。

日本人のうちには君が代すら滿足に歌ひ得る人少し。これ樂譜の智識極めて乏しきためなり。音調と樂譜とを合することを知らざるに因る。泰西の音樂は譜附きである、譜によつて如何なる樂器も相合して奏し得らるゝなり。

泰西の國民は已に學校にて幼少の頃より樂譜に合せて歌ふことを樂しみ、家庭に於ても音樂を學ぶ機會多し。僕嘗て倫敦にて十數個の小學校を參觀す。興味あることは、これ等多數の學校が丸で申合せたるが如く『お歌がすきですか、さらば兒童に歌はせます』と來ることなり。僕は常に其受持教師に其旨を願へり。兒童が嬉々として歌ふさま如何にも興味ありげに見ゆ。僕は後に及びて其理由を知れり。英國にては音樂は學科の重要科目の一に數へられ、兒童もこれに多大の興味を有し、一番すきな學科と云へば先づ指を唱歌に屈すると言ふ有樣なり。

日本にも漸く洋樂の入るあり。ポチ〳〵家庭に入り込めるやうなれど、蓋しこれがある程度まで發達するには多くの時日を要するならむ。

成る程日本人は詩酌趣味に富めり。泰西の人は日本の所謂風流なるものを解せず。日本人自らも只風流を感じ得るのみにてこれを說明すること能はず。見給へ。花下に酒を飮む、花の一片杯中に落つとて日本人はやれ一句やるべし、ヤレ歌あらざるべからすなどと風流がるなり。こんなことは泰西人の頭には何等の趣味を惹起さず。老いたる花が杯の中に落ちたればとて何處に風流ありやと出て來るなり。日本人の風流は直覺にして、智的ならず、幾何學的にあらず。『林間に酒を煖めて紅葉をたく』などの風流は泰西の人には望むべからず。

顧みて

一、船よひ

恥かしいことなれど僕は洋行以前に海の旅行と言ふ程のことをせず。先づ洋行が第一の航海であつた。船暈の苦しきことは人に開けり。經驗ある人に問ふ、『どんなに苦しいですか』、『何んとも言へぬ程に苦しいです。』又曰く『見給へ屹度やらるるぞ』と、言つてその苦しさを説明してくれず。ナーニやらるるものかと獨り威張りつつ、郵船會社で切符を求むる際、一寸風向をさぐつて見ると、『ムーンスーンは、始まりかけますが、大したことは無いでせうよ、』と言ふ。斯くて神戸を出たのは、春もたけし五月中旬であつた。

既にして、船瀬戸内海に入る。海波起らず、その靜さは庭の泉水に浮べる小舟にも似たり。點々として散在せる島の形、大なるあり、小なるあり、又圓く、又尖り、或は笑ふさまにも似て、船はその間を縫ふて走るなり。爽快言はんばかりなし。折しも滿月出でて海波にくだくるところ、詩的と言ふべきか、風流と言ふべきか。僕は初めて世の中に旅行程樂しきものはないと思つた。船暈の苦しさなど想像して見る暇なし。

船門司を出でて上海に着く。蓋し上海は我船の外國に於ける第一番目の港なれば、船の漸く港に近くに及んで望遠鏡などをとりて熱心にのぞく。見るもの何れも珍らしからざるはなし。神戸出帆以來未だ風波に逢遇せず。

上海を出でて船臺灣海峽を過ぎんとする頃、大分搖り初めたり。一寸妙な心持ちになつて來た。併しそは夕食すみし頃なりしかば、先づ先づていつもより早く床に入る。勿論心持惡しきためなどとは人に告げず。翌朝起くれず波既に收まり船の進行すること例の如し。

其後彼南（ペナン）に着くまで海上波穩かにして樂しく航海を續け得たり。彼南を發して約二十時間、船スマトラ島の北角アチンヘッドを過ぐれば、これぞ名にし負ふ印度洋なり。海の神は波を弄して戲れつつあり。船は波に逆ふて進まざるべからず。船の上下運動は劇しくなつた。セイロン島のコロンボに船の着くまで約三晝夜、乘客は一人臥し、二人臥し、食堂に列席のものも一人減じ、二人減じ、五人減じ、十人減じて、さては殆んど空席になつてしまうと言ふさわぎ。食器を破す音の頻繁なるを聞く。

乘船以前、船に醉わじ々々々と威張りしは、空威張りなりしなり。僕も此三晝夜は遂に床上の人となりぬ。食するもの、僅に果物、飲むところのもの僅に牛乳に過ぎず。その苦しさは、予自らにも『何とも言へぬ苦しさ』と說明する外に方法のなきを發見した。

船コロンボに着く。ひよろ〳〵の姿にて上陸せしもの強ち僕一人にあらず。僕より

尙ほ劇しくやられし人も少からず。然るに成る程妙なり。陸に上れば、キヨロツとして居るなり。苦しみも拭はれしやうに去つてしまうなり。翌日カンヂーに行く。此處は佛陀の遺跡である。列車は隧道、又隧道を通じて山又山を上り行くなり。山腹には驟雨到り、凉氣掬すべく、元氣は恢復せし趣あり。然るにコロンボの防波堤にて海波の十數丈も碎け飛べるあり。前途の航路を思へばゾッとする程である。

船既にして港内を出づ。同時に劇しく動き初めた。ソコトラ島の影に至るまで約七晝夜。殆んど全部病人となる。乘客のうちにサイベリヤ路をさらざりしを後悔するものあり。孫子の代まで洋行の際印度洋を經る勿れと遺言し置かんなどと言ふものあり。

船アデンに入りて我等はホット一息つき、ソロ〳〵と床より甲板上に現れ出で初めた。海の難、山の難、產みの難、曰く何の難、曰く何の難、難のつくものにはよきものはなけれど、海の難の一方ならざることを痛切に經驗し得たのである。

二、船の旅

印度洋を經て歐洲に旅行せし人は何人も着港の町々にて車夫、船夫、行商人などの狡猾なるに閉口せし經驗あるべし。我等の一行は揃ひも揃つて外國の旅に馴れざるものなどのみであつた。渡し船で生活し居るものなるなり。客之に應せざれば船を漕がず。甚だしきは船を覆がへすものありとすら稱へらる。門司にて船を雇ひて本船に歸る途中、船頭は早くも酒手を請求せり。此方は五六人の大勢なりしかば少し位にて濟まし得たれど無勢の時はみす〳〵馬鹿を見るに到るのである。一行の中には『内地の門司で既にこの有樣、先きの旅道が案じられる』などとこぼし初めるものもあり。

爾來到る處にて幾度となく五月蠅き目に逢つて遂に歐洲に入つた。然るに端なくも又歸路を印度洋にとるの止むなきに遇ひ同じ道を再びするの愚を學んだ。

外國の旅に馴れたる後にても矢張り港にては五月蠅目に逢ふなり。僕偶コロンボに上陸す。私用ありしため單獨にて行く。巡査に郵便局の所在地を聞ける時、傍に土人あり、予に從つて來り郵便局を示さんと言ふ。僕に既に巡査に示されたるために之を知る。案内は用なしと斥くれども予に尙前後して來るなり。五月蠅ければ途中用なきに勸工場に入つて繪端書などを見たる後、外に出づれば例の男は予を待つて居るなり。郵便局に案内せんとて予に從ひ來るなり。既にして局に入り用を果して出づれは尙ほ僕を待つて居るなり。理髪店の所在を商店にて予が尋ね居りしを聞き居て、卽刻理髪店に案内せんと言ふ。予は之を斥く、土人去らず、更に『理髪店は私の店です』と、又曰く『私は金を貰はんために貴殿に案内をなすにあらず』と、二つとも嘘の皮である。理髪店より出づれば彼男まだそこに予を待つて居るなり。予が理髪師に博物館の存在を聞きたるにより、彼また予を博物館に案内せんとて人車に乘れと言ふ。予は電車に乘りて行かんと言へば又電車に乘り來るなり。僕は獨りで行き得る故土人に歸れと言

ふ。さらば案内賃をと請求す。其面々しさ凡そ斯の類なり。かかることはまだしも、僞金を摑み、懷中をせしめらるるもの少からず。油斷もへチマもあつたものにあらず。

三、三寸の舌

どこの國でも同じこと、土地の風俗、人情を察し、然るべき社會で交際などせんとせば第一の武器として擧げらるるものは『會話』である。會話が不十分では迚も社會のことがよく分からぬ。新聞や、雜誌は讀み得ても人に交ることは出來ない。交らんとしても話が出來ぬと窮屈の爲め避けるやうになる。武器なしの戰爭は今日では不可能である。

さなきだに話柄に乏しきを普通とする日本人が會話に事缺くと言ふことであればどんな手腕家でも交際社會に入つて活きたる社會書を學び、知名の人を訪問して議論をなすは愚か、質問も出來ず、又先方の意見も、十分に領解出來ぬなり。成る程下宿屋

の生活、買物、學校内での研究などには其土地に到着後程なく、差支なき程度に進むなり。そこで多くはそれにて己れ自ら其國の語學に卒業してしまうなり。自己免許を下すなり。日常生活に差支なければ此上は苦んで會話などを習ふ要なし。日本に歸れば會話など上手に出來たつて用ふる途なし。書くこと讀むことがもつと大切なりと。多くの人は斯かる意見を有するなり。成る程一應御尤である。併し書くことと讀むことの大切を實際に感じて居る人は會話も上手になるのである。會話だとて文章の構成は書くものと大同小異である。日本の如く言文に大差あるもの他の國に見ず。

日本人が外國に來て會話に長せざるは、日本語が他の外國語に比してその相違せるの著しきにも因るべけれど一つはあまりに書物により若しくはつまらぬ語學の教師など言ふものに重きを措き過ぎて、實際活きた先生を活用せぬにありはせずやと思はる。換言すれば書物と語學教師だけで滿足せばあまりに寂寥なり。更に活きた會話の先生を外に於て求めざるべからず。これには多くの時間を要せず。又月謝も要らぬのであ

る。卽ち『注意』してあらゆる機會を語學修養の資に供する事である。例へて見ると「レストラン」に行くとする。人が周圍に居て互に話し合つて居る。一寸失敬して言葉使ひを聞く。そして其間に言葉の用ひ方を覺え、次に之を應用して見る。また買物にでも行くと買ひものに來て居る人がある。應接ぶりを一寸伺つて、一つ二つ言葉を覺ゆるのである。道を行く人の話が耳に這入る、それが會話の先生になる。演說會に行く。これも會話の稽古になる。日曜日などには下宿の一室に閉ぢ籠たりせずに土地の人と共に散步して成るべく多く話し、多く聞くことを勉むるなり。斯かる場合は聞いたことを實地に應用するよき機會である。室の中などにてはひとりで流暢に饒舌れても人の前では中々爾ふは行かぬゆへ成るべく人の前で實地練習を行ふ要あり。外國語と日本の語とは文章の構成と其言ひ表はし方の異る爲め、初めは頭の中で文章を造つて然る後發音するなり。之をあわててやると、文章の半分まで行つた處でものにならず。新に文章をやり換へる要あるなど、何人も經驗せしところなるべし。餘程外國語

に達したと言ふ人でも、日本的英語、日本的獨逸語、日本的佛語臭を見出さる。普通の會話に用ひらるゝ單語は、日本ですでに修得して置きながら、よくこれを應用し難きは文章の構成に相異あるためである。例へば日本語では『お茶を持つて來て下さい』と言ふ。英語や、獨語では『持て來て下さい、お茶を』と言つたやうに、言ひ現し方に相違あるためである。その外また單に句調をよくする爲めに用ひらるゝ語あり。例へば獨逸語の nal の如き denn の如きこれである。何れの國語にもこんな語はあると思ふ。求めてこんな文字を用ふる要はないかも知れぬが何しろ流暢に言ふことが必要で、日本的に直譯をすると假令先方に領解さるるとしても其響きが何となく妙になるのである。斯ふ言ふ僕なども會話の下手の一人である。苦心した一人で、而かも下手の大將の方である。文章を書いて外國人に見せても、文法に誤りなく意味も解るが何だか妙に響くと言ふ。日本的と言ふことを含んでおるからである。一文章に用ゆる各個の字句は例へば建築材料の如し。日本人はこれを以て西洋に居て日本的家屋を組立

てんとする爲め、西洋の家屋に住める人に變に聞えるのである。

日本のうちには、邦人間で、大議論をなしても、外國人の前では何でも敷でも、「エース」、と「ノーウ」の二つで通る人あり。外國人に交ることを嫌ふ人も少からず。僕は在歐中多數の友人を外國人間に有し、多數の家庭を知ることを得たる爲め、お蔭にて無月謝の會話を習ひ、その他に種々の便利を得た。日本人の泰西に居ながら泰西に通せざるは、外國人と交ることに臆劫がる爲である。

四、舌の應用

僕は實際『下手の横好き』で、在歐中隨分アチコチで演說をやつて見た。ほと〳〵六ケしいのに閉口した。僕自ら餘程最負目に見ても痛快だと思つた事は只一二度あつたかも知れん。或は全くなかつたかも知れぬ。一寸内緒で棚下しをやつて見やう。諸君笑つてはイヤだよ。

獨逸に居たとき、某大學で一度やつて見た。初めのことでもあり、場所が場所ゆゑ用意に多くの時日を費した。朗讀演說であつた。朗讀は力が外の方へ廻つてうまく行かぬ。併し原稿なしに數時間も饒舌ことは迚も出來なかつた。

其後某老婦人に招かれて夏休みや冬休みの時に行つた。これが丁度演說の稽古に好都合の機會であつた。此婦人は宗教家なりし爲め僕を引張つて行つて彼方や此方で强制的演說をやらせた。初めは、十分、次に二十分、次に三十分と言ふ具合に話す時間を延長した。勿論原稿などは禁物であつた、考へる暇も得られなかつた。知らずに居ると公開の席上で突然僕を紹介して話を致すと言ふお觸れなれば、其間に考る暇などのあるべき筈なく、豫て話すことがわかつて居ても考へたりすることを許さなかつた。と言ふのは其婦人は極めて嚴格であつた無常識と言ふ程嚴格であつた　僕を自分の息子だなどと他人に紹介して居た。僕は一日に二度も話さねばならぬこともあつた。其婦人と共に田舍へ演說旅行など致した時には一日二度づつ公開の場所で話さねば

ぬやうに仕向けられた。其間に面會、應接、食事、訪問、迚も話題を考へる暇などなかつた。森の中に三十分も這入つて考へて見たいと思つた。畑の中などへ出かけて獨りで考へて見たいと思つた。そして調弄半分に言ふ『アラまあ演說の用意をして居るのかへ、そんな事ではいけない。演說など言ふものは決して用意を要すべきものにあらず。自分は今まで何千百回演說を致したけれども一回も用意をせず。話柄は自ら湧き出でねばならぬ。ドーラ一つお妨げを致さん』と戲談にもその意地の惡さよ。

僕は此間に演說の稽古をやつた。新聞などには僕の來ると言ふやうなことが大きく到る處に掲げられて居たので、お仕舞には隨分鐵面になり、橫着になり、少しは聽集心理なども察し得た。

後倫敦に來て幾度となく演說をやる機會に逢つた。此時に及んで初めて曩に老婦人が僕をして强制的に何かを饒舌らせた功德を思ひ出し、後ればせながら有り難く感

じた。

諸君こんなことを言ふと如何にも難なくお饒舌が出來るものかの如く聞えるかも知れぬがそれは誤りだ。考へても見給へ。日本語を用ひてさへも演説などと言ふものは六ケしいものである。それに外國語と來て居るのだから大抵は察せらる。

倫敦では聽集を少し煙に巻かんと試みた。餘程横着なやり方をした。一定程まで泰西の好い處を擧げて、聽集を逆上げて谷の底へ落すやうなことをやつて見た。西洋に來て西洋の惡口ばかり並べて居ては、迚も成功せる演説は出來ない。日本にも種々の缺典はあると前置して然る後當らずさわらずボチリ〳〵と善いところを抜き出して見た。演説の後には多數の男女が僕の所へやつて來て、僕の手を握りながら禮などを言つて居た。交際の上手な泰西人のことであるから眞のことは解からぬけれども、私の會へも一度來て演説して下されと頼む處などを見ると拙なき未熟の片言を嘲罵した譯でも無いと、先づ自分に都合のよき理屈を附けて置きませう。

成る程考へて見ると外にも多少理由はあるかも知れぬ。何しろ外國人殊に西洋で、公開の席上で饒舌などを多くやらぬ日本人が而かも倫敦で而かも獨逸語で話すと言ふだけですら變調な番附である。僕の話を聞かぬ前から既に『何を話す？』と想像に驅られて居る調子だから。

若い男女の集れる席上では、講話中時々罪のない滑稽などを言つて見て、大口開けて笑はせるなどのことも時にとつての愛嬌である。片言の滑稽など必要でもない癖に大に喝采を博することがある。演説中に大切の文句を忘れ、進退谷まりし結果、大膽にも——恰も學校で先生が生徒に質問する體にて——聽集に尋ねて見たりすることもあつた。これは勿論恥の滑稽である。物識り面して彼方からも此方からも言つてくれるところなど一つの餘興でもあらう。

倫敦での演説は、秋に入りて獨佛墺に於ける大規模の演説會に臨む豫習の積りであつた。「プログラム」すら既に定まつて居た處、例の戰爭騒ぎにて中止となつてしまつ

た。ものずきの僕には遺憾であつた。

五、本　道　樂

風流や趣味だなどと言ふことは、僕にはお門違ひである。併し何か道樂があるかと尋ねらるると、只一つ持つて居るっ書物道樂である。時には飯よりも本類の好きなことがある。書物道樂だなんて言つても僕は多く讀んだと言ふ程に讀んで居ない。古本店などの門に立つて日の暮れること稀ならず。只何となく買つて來ることが好きである。併し強ちツンドクばかりでもない。面白いものを見附け出して買つて置くと必要のときに用に立つ。私は貧書生ですから、書物道樂だなどと言つても藏書家と言ふ程度のもので無いことは勿論です。私に煙草を好みませぬ。又酒とも友達ではありませぬ。麥酒の信者ではありませぬ。私に本屋の店先で若しくば書籍屋から書籍の廣告が來たとき、これを思ひ出すのが常でした。煙草と酒の爲めに他人よりは餘程節し得ら

る。これを書物代に宛てるも妙ならずや。併し其度はいつでも過ぎて却てそれ以上に書物を買ひ過ごすことが少くありませんでした。

日本などでも、近頃はよい書物が出るやうになつたやうです。併し概して言ふと獨逸等に比して較べものにならぬ程ではないかと思はれます。獨逸の書物は日本の書物に比べては安いやうです。流涎幾十丈、低徊して書店の門を去り難きことあり。それでも金がなければ仕方がない。買はずにすませねばならぬことも度々ありました。欲しいと言ふ念の起つた時は、まるで餓鬼の如くですネ、只無闇に欲しいんですから。

獨逸に居た時圖に乘つて、貧乏書生の體面をも顧みず、買ひ過ぎた折柄、爲替　延着、下宿屋で頭を下げて仕拂の猶豫を賴むなど、思へば實際無常識ですよ。

書物道樂は貧乏書生には、あまりに對象が多き過ぎる。出來るなら何か外の——もつと範圍　狹い　——道樂に鞍換を致して見たいと思ひますが、一寸然るべきものを見出しませぬ。

獨逸で三年餘もかかつて折角骨を折つて集めた書籍の全部が戰爭騷きで受取る途が無くなつてしまひ、大將大に閉口致して居ります。

六、取るものは取つて置け

歐洲戰爭の騷ぎで『取るものは取つて置け、貰ふものは早く貰つて置け』と言ふ教訓を得ました。こんなことを言ふと如何にも慾の深い男のやうに見えますけれども、慾ばかりで言ふのではない。權利と義務の問題です。事件は斯ふです。

僕が英國に居るとき獨逸の鐵道局から獨逸の風俗、習慣、名所、古跡などに關する幻燈用書約三百枚演說用として調製せしめ進呈すると申して參りました。一個月で出來上るにより送附の場所を知らせてくれと申越しました。私は何れ三個月も立てば獨逸に行くから其時に頂きませうといつておいた。處が其うちに戰爭騷ぎとなり、遂に手に入れること能はず。獨逸土產に幻燈書は蓋し適當のものなりしならむに、此始末、

同胞に語る好個の材料を棒に振りたり。

英國にありし時予は倫敦の獨逸銀行に金を預け置くを例として居た。獨逸銀行では通帳を渡しませぬ。或日僕は途中で思ひ出して予が預金の總額を尋ねに行つた。銀行に來てフト思ひ附いた。待てよ、獨逸銀行、本國は戰爭を仕初めた。今悉く取つて置く方が安全と直ちに氣が變り、全部引出してしまつた。——諸君心配し給ふな全額と言つてもタッタ數百圓に過ぎぬ。併し貧乏書生の身の上から言へば巨萬の富にも當る。

——それから二三日經つと英國が宣戰を公布した當日丁度獨逸銀行の傍を通つた序に物好きにも態々路次を這入つて樣子を伺つた。果然銀行は疊んでしまつた、大小の函を今車にて運びつつある所、たつた二三日の所であぶなき處を免れた。

獨逸に居た時、某町の某銀行に金を預けて置いた。利息が割に高いと言ふので永く居る日本人に知らせて貰つて僕も然らばと、その銀行に行くことに定めて居た。——いつでも多くの金は預けたことなきより、利息が高ければとて、それによりて受くる

恩典は大ならず――處が同じ町の一銀行が突如として破產してしまつた。小さな町で一の銀行が破れた場合、全町の經濟界は一論、他の銀行に及ばず影響は實に驚くべき程である。僕はある日獨逸の友人から聞かれた。僕の預けて居る銀行の名を。然るに友人は僕の返事を得たる後、『その銀行も安全ぢやありませんよ』と。僕は卽刻同銀行に驅せて全額を引き出してしまつた。其時の僕の財產驚く勿れ、七八百馬克　銀行員は妙な顏をして僕に入額引出しの理由を尋ねた。僕は要るからだと答へた。僕と同じ下宿屋に住んで居た日本人にも其事を話した。其人は僕の全額より五六倍も多く其銀行に預けて居た。處が同人は、十日經つと佛國へ轉學することになつて居たので僕より注意は聞いて居ながらも、ドーセ一週間の後には全部引出さねばならぬ。まさか其間に銀行が破產などすることはあるまい。その上、僕が銀行から全額を引出した翌日、下宿へ銀行の人が來て、大丈夫です、心配は要りませぬ。安心して預け　置くやうにと日本人の方へも申傳へて下されと。こんなことなど參照して、まさかと友人は思つて

居た。

然るに、然るに、南無三寶、二、三日にして同銀行は果然閉ぢて仕舞つた。道がの僕の友人も、蒼くならざるを得なかつた。下宿、其他への拂ひも出來ぬ。勿論佛國行きの旅費すら無いと言ふ始末、僕は一應注意して置いたのだから、僕の義務はまづ濟まされて居たものの氣の毒であつた。『君は敏捷なことをやつた』と同君は言つた。何は兎も角お蔭で僕は禍難を免れた。

處が失敗もある。倫敦で獨逸人會の招きに應じて數回講演をした。講演科は何時でも受取れると思つて急がずに居た。處が幹事の先生、突如として歸國してしまつた。徵兵の關係ありしためである。獨逸の本部からは爲替が來なくなつてしまつた。トウトウ受取るべき權利のあるものを捨てねばならぬことになつて仕舞つた。種はまだまだあるが、先づ棚下しの例はこれ位でよからう。

七、外人の眼に映ずる日本人

獨逸語や英語で書かるる日本に關する紀事の中には中々立派なものがある。併し時に呆れて三日も開いた口のふさがらぬ程のものもある。僕ある時、獨逸で發行する某「カレンダー」を讀んだ。其中に日本と支那に關する紀事が一緒にして書かれて居た。執筆者は某と言ふ婦人であつた。あまりにひどい事が書いてある。委しくは記憶せぬが、何でも次の様な意味だつたと思ふ。獨逸では日本の事と言へば善く言ひ支那の事と言へば惡く言ふ傾向がある。日本人の道德性は極めて疑しきものである。夫婦らしく散歩や、旅行するもののうちには、例の藝者が甚だ多く居る。日本人はよく離婚をする。離婚された女は何物をも得ずして歸つて行くと言つたやうな風で、自己の經驗した惡い例をのみ擧げてそれを日本の國民性なるかの如く尤らしく論じ、支那の方のことが好く書いてある。僕は支那の事は多く知らぬが、あまり日本人

を侮辱した書方、よし一つ發行人の所へ其旨を書いて次年度からこんなつまらぬものを揭げさせぬやうに仕樣と考へ、倫敦から書面を獨逸の發行元へ出した。其意味は凡そ次の如くであつた。

私は偶然貴殿より發行されたる「カレンダー」を手にし、日本に關する紀事を讀むことが出來ました。成る程筆は流暢ですが、內容に至つては、日本人として驚かざるを得ませむ。自己の經驗した惡い例をのみ擧げてそれを國民性として論ずるならば、世界の各國に惡魔の巢窟と名づける外に名がないかも知れぬ。凡そ一國民の性格を論じてこれに斷案を下すには觀察の正確を期せねばなりませぬ。折角の立派な「カレンダー」にあんな不確實の紀事をお交へになることは考へものではありますまいか。私は日本人の一人として貴下の三省を望みたいと存じます。云々間もなく發行人から返事が來た。僕が紀事に關して注意した事を謝する旨を述べ、更に執筆者が日本に居た關係から其土地の事情に明るいものと信じて居たと言譯し、どうです、支那に於ける獨

領青島の事を主として紀事をお書き下さいませんか、來年度刊行のものに載せたいと思ひますと言ふ意味であつた。

僕の考へるには、何でも前述の紀事執筆者は日本で氣に入らぬ事に多く出くわしたため日本のことと云へば厭になつたものと見える。支那で割合によく持てたものと見える。

凡そ他國の風俗、習慣、國民性などを論ずるに方つては、餘程注意して判斷せねばならぬ。感情を主として結論などすると、大きな誤りを來す。又感情が主になつて居れば正確な觀察が出來難い。その結果、『喰はず嫌ひ』、『見ず嫌ひ』になつてしまう。

八、交際道

訪問は、僕の道樂の一つかも知れぬ。イヤ道樂三昧などに訪問をすると言つては先方に對して失禮に當る。實際のところ、訪問によつて利益を得ることが多いからである。

日本人は西洋などで人を訪問するに臆劫がる傾がある。大學で世話になつて居る主任敎授を訪問する位が關の山である。「ドテラ」の儘で客に接することを平然とする日本人にありては、泰西の禮式はあまりに窮屈である。日曜日などで學校に行かぬ日は、先づ寢着のまゝにてゴロ〳〵して居ると言ふ風のものが少くない。此方から特に訪問すべき對象を造るなどと言ふことは、一寸やらぬ芝居である。

僕は時々他から非難をされる。あまり出過ぎて、生意氣だと。降誕祭の前後等は十日も續けて諸家の招きに忙殺されたことがある。『僕は永く居ても招かるゝやうな獨逸の家庭を知らない。それにッヒちかごろにやつて來た君が、既に斯ばかり多數の知巳を有するは何事ぞ、少しは僕に分け玉へ』などと友人にからかはれたこともある。實際僕は機會を外さずによい家庭を見習はんと思つて居たので、割合に氣輕な獨逸人と必安くなることが出來たのである。著述などを見て、編者がその土地に住める塲合、

又は演説を聞いた場合、逢つて見たいと思ふと直ぐ手紙を直接に本人に書く。そして面會の時日を問合す。返事が直ぐ來る。何日何時珈琲を宅で一緒に飲みませうなどゝ言つて呉れる。それなら〆めたものだ。行く。話す。再會が出來。問題を以て行く。直ぐに示して呉れる。時には他の家庭の人と落合すこともある。遊びに來いと言はるる。行く。又行く。親しくなる。まア斯ふ言つたわけで技藁と分るゝうちに多くの知人を得ることになる。土地の人を多く知つて居ると便利なことが多い　斯んなことはやらねば少しも出來ないものゝ、少し此方から進んで行けば六ケしいことではない。寢て待つて居ても先方からは中々來て呉れぬ。腰輕、尻輕に出るのに限る。

僕は旅行などしても此傳を時々やるので同行の連中に迷惑を與へること稀ならず。それでは濟まぬと悟りて後は、單獨旅行を主としてやつた。同行の人なければ迷惑を與へて氣の毒に思ふ要はない、氣儘にソリヤ新聞社、ソリヤ學者、ソリヤ訪問と言ふやうに、自由の行動がとれる。一擧兩得とも言はゝ言へる。旅行などの序でに初めて

人を訪問し、思はぬ御馳走などになりて、御用があれば何時なりと遠慮なしに仰せられよなど言はれて分れしことも一再にして止まず。日本の友人からは、『外國に來て甘い汁を人の家で吸ふ』などゝ調弄れたることも一度ならず。他人の家で御馳走に預りしこと、幾百回なるを知らず。僕も亦無遠慮者なるかな。

日本などでも『家風』と言ふことがある。どこの家へ行つても何となしに少しづゝ變つた處がある。殊に大家内の家庭などへ招かれた場合は、思はぬ研究材料が得らるる。これは訪問の儲けものである。都合の善い副産物である。泰西では日本の如く主人丈けが客と食事を共にするなど言ふことはない。全家内が揃つて食卓に着くのであるから、樣子を伺ふと目錄めるものには好都合である。

主人と雖も君とを研究材料の中心として、小供の動作など一寸失敬して見る。教育の方針が凡そこれで察せらる　先づ御馳走に預る場合には、細君御自慢の料理なれば、第一にうまく出來て居ることを吹聽せねばならぬ。默り込んで喰ふばかりして居ると

向ふから逆に來らるる。『どうです、料理はお氣に入りますか』と、催促を受けて『誠にどうも結構です』などゝ言つても、響きが惡い。同じ賞めるなら、先づ催促前にウンと賞めて置く。細君鼻を高くし得々とする。そこが一寸御客の腕のあるところ。どこでも同じ事、大明神は調子よく持上げて置くに限る。殊に泰西に於て然り。

九、音樂、舞踏と芝居

西洋に居て、西洋人殊に女人から殆んど毎常問ひかけらるるもの凡そ三つあり。果して何？　諸君當てゝ御覽、答へて曰く、『音樂が好きですか』其二なり。『芝居が好きですか』其一なり。『舞踏が出來ますか』其三なり。

諸君は此三つの問ひを見て、凡そ西洋に來て居る日本の留學生などが如何に答ふるかを想像し玉ふであらう。諸君は又同時に如何に西洋の人々が音樂、無踏、芝居などに興味を持ち居るかを察し玉ふことが出來る。諸君、西洋は實際、音樂と、芝居と舞踏なしには夜の明けぬ國である。宗教家などゝ名乘る人ですら、『勉めて芝居を御覽なさい』と言ふ右樣、以て如何に其娯樂が國民生活の間に喜んで迎へらるゝかが解る。

僕も亦實際日本の先輩で西洋に居た人などから諭されて居た。芝居は語學の練習などに都合がよい。豫て「テキスト」を讀んで置いて然る後に見に行くと、解り易いと。僕もこゝみかけて見た。併し到底そんなまどろしい事では追つかぬことを悟つた。其理由はこうである。長い筋書（テキスト）を讀むと言ふことは忙しい生活の間には容易の事でない。其內には時代ものあり、流行ものあり。從て或時は多く方言を用ひ、或時は古い語をもつと外に良い方法を發見したからである。卽ち芝居を見る目的を變じた。語學と言ふ事なら、明白で、文章の組立などもまづ結構である。これを直に應用することも出來る。演說には普通のもの、專門のもの種々あり。演說會等には多く入場料を要すを常とすれどそれでも芝居よりは安し。そしてこれを語學練習の方面より見ればズッと功果多し。

音樂の盛なることも中々夥しい。獨墺では、「カッフェー」等で毎日奏樂をやる。中には大仕掛けのものもある。日曜日には終日奏樂が行はるる。「カッフェー」を飲みながら音樂を聞くと言ふ有樣である。倫敦などでは多數の公園内に音樂堂が設けられて居て定日に音樂會が催さるる。

其他音樂的娯樂、「オペラ」、「コンセルト」等の催さるるもの甚だ多く、入場料なども實に高い。それでも始終觀客がある。

個人生活の間にもこの樣がよく現れて居る。「カッフェー」、夕食などに招かれると、食後の御馳走は大抵音樂である。西洋では中流以上の家庭で「ピアーノ」を有せざるものは先づなからう。

舞踏が若い男女を牽きつける力は實に大したものである。泰西の若い女などは日本に西洋の所謂舞踏會なるものなしと聞きて、眼を白黒にして驚き、『マー呆れた、樂みの少き國、それでよく若い男女が滿足して居られたものですネ』とは、度々承つた言葉

である。

舞踏は年中開かるゝが、最も盛なのは秋から冬にかけてゝある。其中でも一月二月は盛な頂點であらう。假裝舞踏會は一寸無禮講と言つた格である。女も男も假面を用ひ、服裝も思ひ々々に變な事を工夫する。女子にして海軍服を着て武者振りなどするものあり。何しろ若い男女の無禮講と來ては、凡そ盛なことが察せらるる。その上に西洋は男女自由交際の故郷である。舞踏には必ず酒が附物である。若い男女が飲みては跳り、跳つては飲む。時を忘れて夜中ブッ通しに遊び戲れ旭の影を見て家に歸り、其足で勤め先きへ行く者など決して稀ならず。これを二夜も三夜も續けて平然たる姫御前あるに至つては其精力に驚かされざるを得んやである。西洋の大都會にありては、數千百の會がある。斯かる會が少くとも一度は此假裝舞踏會などを行ひ、會員が相集まるのである。其外に「ホテール」料理店などにて其期間、毎週何回と言ふ樣にして行ふ。勿論入場料を取り、酒を飲ませるなり。何

しろ幾千人の男女が相混じて舞ふと言ふのだから實に盛なものである。

由來歐洲の天地は、冬の間は雲低く日短く實に蔭鬱である。この蔭鬱なる時期は屋内の娯樂が盛な時である。徹夜の娯樂が行はるる時である。社交に花の咲く時である。年若き男女は勿論年取りし人までが共に浮れて遊ぶのである。

十、日本人が學ぶべき歐洲

日本に遊ぶ西洋の人が、日本の風俗習慣を見て、其間に日本人の缺典を發見する如く、我等日本人も西洋に居て西洋人の缺典を見出す。これは西洋眼で東洋を見、東洋眼で西洋を見るにも因るべけれど、實際大なり小なり缺典を有して居らぬ國民は不幸にして世界に存在して居ない。西洋人例へば英國人にしても獨人にしても、乃至は佛人にしても中々自負心の強いものである。西洋は世界文明の中心で、これが永久性のものゝ如くに考へて居る。西洋の風俗、習慣に反するものは、ヤレ滑稽だ、ヤレ可笑しいと見做す傾がある。成る程日本人だつて日本の惡い習慣を中々執念深く維持して居るのを見ても、如何に古い習慣を捨てるに面倒であるかゞ解る。

處が諸君、百聞は一見に如かず』で、西洋などへ行つて、いろ〳〵と見たり聞いたりして居る間には、西洋のものを日本のものと比較したくなる。その結果日本人の有する特徴と缺典とを一層痛切に感ずるやうになる。これは西洋にも我等日本人が見習ふべきことの少からずあるからである。

成る程歐洲は、今、世界文華の中心である。文明の花園である。併し暗黑の方面を見れば、歐洲に過ぐるものは世界に無いかも知れぬ。そこが實に面白いところである。文明の理想は蓋し暗黑面を有せざる光明の世界であらう。此光明の世界が我等日本人の理想としなければならぬ世界である。文明の國から暗黑な部分を輸入したくない。善いところ丈けを頂戴致したい。」欲の深い『若しくは』蟲のよい』言分かも知れぬが、これが理想でなければならぬ。西洋に來ると此感が痛切になつて來る。善いことを見る。

我等も斯くせねばならぬと考へる。惡いことを見る、我等はこんなことを見習つては大變だ。と。

日本の諺に『惡事千里』と言ふも、『善事千里』とはまだ聞かぬ。言つても宜からうと思はれるに……成る程惡い事は早く聞える。早く見習ふ。善いことは併しそのひろまり方も、見習ひ方も實に緩慢である。『惡事千里』に『善事十里』が比較になるかも知れぬ。見給へ西洋の惡い風俗や、習慣などゝ言ふものが、雲山萬里を越えて極東までも頻りに走り行きつゝあるではないか。何故であらう。『惡事』とか『暗黑』とか云ふものは、先づ惡性急性傳染病の如きものである。その來り襲ふや突如たり、一度人を襲ふと命をとらねば止まない。これが文明の背後に居て文明を毒するのである。歐洲の文明も暗黑と云ふものゝ爲めに中毒を受けて居る。慢性中毒でまだ妙藥が發見せられない。恐らく絶望かも知れぬ。歐洲文明の裏面には恐ろしい暗黑面がある。併し一面には中々エライものがある。其エライものが文明を生んだのだ。日本は世界の日本に

なつたと云ふ。ウエル、併し今日の所謂世界の日本は、まだ〳〵これ位では大きな聲を出して呼ぶ程には行かない。日本の國民性が變化せねばならぬ。國民性の變化など言ふと危險思想呼ばはりをするかの如く聞えるかも知れぬ。それは誤りである。僕の言ふのは國民性の高調である。國民性の進化である。これが何よりも大事の處である。

文明が進んで來るとこれに伴ふ種々の現象が出て來る。其中には厭なものが少くない。國民性の進化は文明の惡しき副産物を防ぎ能ふことも隨分ある。日本の文明は成るべく早く成るべく健全に發達させ度い。そして文明によりて生ずる惡しき副産物を成るべく缺きたい。豫防藥の功果を奏するものを見つけたい。西洋人のうちにはこんなことを考へて居る人がある。早く咲いた花は早く散る道理で日本も或は存外早く散るかも知れぬと。諸君そんなに早く散つてはあまりに張合が無いではないか。見榮がないではないか。

西洋の文明を我等が伺ふのは非常な手本である。日露戰爭には日露兩軍の特長と缺

典と言ふものを歐洲の軍人がチャンと悟つた。これは一種の經驗である。今度の歐洲戰爭などにも恐らく餘程の參考となり得たであらう。またなり得るであらう。歐洲文明の特徴と缺典とは後進の文明國例へば日本などにとつて誠によい手本である。參考品である。これに鑑みて成るべく缺典を未然に防ぐやうにせねばならぬ。

僞りの歐洲文明、假裝せる歐洲文明は、我等の見習ふものでない。我等が歐洲より參考とし、且極東に移植せんと力むるものは歐洲文明の眞髓であらねばならぬ。中樞であらねばならぬ。日本人は今日何を措いてもコツ〳〵と磨いて行かねばならぬ秋に遇つて居る。うか〳〵して居ては存亡の問題が起るかも知れぬ。油斷も隙もない世の中である。一に奮勵、二に奮勵、三にも奮勵を要する秋なのである。

武裝せる海上の五十日

一

僕は紀念の爲め今予が歸朝紀を手短かに書き初めたり。これ尋常の海上旅行にあらざりしに因る。

千九百十四年八月の初め大英國の一度宣戰を公布するや歐洲戰爭は世界戰爭の觀を呈しぬ。大日本帝國も亦獨墺の兩國と戰を交ゆるに至りぬ。倫敦より橫濱に至るまで海路一万三千里。忽然として武裝の海と化しぬ。海の神は如何なる邊りに其戲れの手を弄ぶべきか。神の外には知るものなし。

日本郵船會社の汽船常陸丸は、八月二十九日正午テームス下流に於て、武裝せる海を航すべく錨を拔けり。

これより先き獨、埃より一先英京倫敦に逃れ來りたる日本留學生等の一行あり。日本郵船會社はこの爲めに特に特別三等なるものを常陸丸に急設し六十餘名の日本人客を收容せり。一等二等は何れも滿員にして事務員室も乘客の爲めに充てらるゝに至れり。

數百人の生靈を左右すべき六千三百餘噸の常陸丸は、海の表にて如何なる運命に遇ふべきや！常陸丸自己も知らず、また乘れる人々も知らず。

武裝せられたる海上に於ては、六千餘噸の常陸丸も敵艦の前にその脆きこと片々たる落葉にも似たり。思へば一萬三千海里、知らず常陸丸は、堂々として、最終の港に入り得べき否や。

怒濤船を叩きて『航海苦』を稱へらるゝ、英國海峽もビスケー灣も稀に見る海の靜さに何れも滿足して船上に語り合ふ。話柄は何れも戰爭談ならざるはなし。

九月三日、午前三時、我等常陸丸のジブラルタル海峽を過ぎんとするや、夢然として

て一艘の我船に直進するあり。これ英國の水雷艇にして、常陸丸の國籍其他航海の方向等を調査するの任務を帶びしものなりし。該艦は其要務を果したる後忽然として何處へか消え失せぬ。

二

我等が佛港マルセーユに着きしは九月五日。倫敦を出でゝ一週を過ぎたれば、戰況にも多少の發展あらんとて我等は直に新聞を購ふ。曰く獨軍已に巴里の附近に突進せり。露國は幾百萬の大軍を獨逸國內に送らんとすと。要するに彼我大勢の詳細はこれを知る事能はず。

マルセーユは我等が入港すべき歐洲最終の都なり。思ひ起す。四歲前、此マルセーユを歐羅巴の最初の都として見物せし事を。爾來歐洲を橫斷し、其間に、倫敦、伯林、維也納等の大都會を見たる予には再見のマルセーユは、これが昔見し同じ都市かと思

ふ程に物淋しく感じたり。

男は戰場に出陣せしにも因るべけれど、市街概して活氣を帶びず。商店の振はざることも夥しく、夜の十時には電車も停まり、市上行く人の影極めて稀なり。點燈の下に立つてあわただしげに夕刊新紙を讀みつゝある人々のさまもいとどあわれに見えぬ。

佐藤塊國大使の一行維也納よりマルセーユに急行し常陸丸に捨乘す。

地中海には英、佛の艦隊あり。獨艦は既に其跡を止めざるも、塊國の艦隊あり。アドリアチックより出づる能はずと稱へらるれども、尙は危險なしと言ふべからず。常陸丸はシシリー島の南側通過の常例を脫して特にその北側を航す。海上英國軍艦、印度の兵を乘せたる數隻の蒸汽船を率ひて西に向ふに逢へり。

九月十一日、ポートサイドに着く、蒸し暑きこと言外なり。新紙は傳ふ。巴里は未だ陷らず。露軍獨逸に入り、キヨーニヒスベルヒを包圍し、長驅してダンチヒを突かんとし、一方にはポーゼンより首都伯林に向へる大軍あり。南塊境を急進し維也納に前進せんとすと。然れども我等の手にし得らるゝ新聞は悉く聯合軍側のものに係り、敵國の新聞も併せ見ぬ以上は正確の判斷は下されず。

ポート、アイドには英の爲めに捕獲せられたる獨逸の巨大なる蒸滊船十數艘の港內に列べるを見る。

三

我等は地中海の航海を終ると共に危險區域を脫するものと思ひたりき。ポート、サイドに着きて、『マアこれで安心です』などゝ言ふ聲の交換せらるゝを幾度か聽けり。前途を見れば、尙は未だ其半分をだに來らず。果して我等は安全に豫定の航海を續け得べきや。我等は素より斯く信じたりき。

紅海に於ける航行は全航中最も我等を苦しめたり。炎々たる暑さに加ふるに、微風だになく、偶々風ありと思はれても後方より來るが爲めに其効果は零にも等し。常陸

丸の煙筒より出づる煙は、垂直に上れり。その苦熱以て察すべし。

戰爭の話も今は少なくなりぬ。只想像を描きつゝ、斯くやあらむ。爾かあるべしなど噂するに過ぎず。

我等は暑さに疲れて相語るの勇もなく、特別三等の六十餘名は迚も船内の床に眠る能はずとて枕と毛布を運んで甲板上に臥す。

紅海を過ぎ行く間には偶々陸を見得しかども、これ悉く石山にして、其色は褐色をなし、樹木などのある筈もなく、見ても暑さを增すかと思はる。

紅海に於ても我等はまた英國艦の印度兵を輸送せるを見たり。

之を要するに紅海にては、『暑い〳〵』の百萬遍を繰返したる外、何等の新發見も得ず。

四

紅海の將に盡んとして双方の陸地相接するの處、信號所あり。我常陸丸は何事が信號所の報ずる處を聽く。この信號は蓋し可なり長かりき。我等の前途に關する注意なるべし。或は抑も亦外に珍事ありや。

信號の要旨は直に乘客一般に示されたり。その物語るところは何ぞ。過敏となれる乘客は相爭ひて其揭示場を注視したり。曰く

『三隻の蒸汽船ベルガル灣に於て獨逸軍艦『エムデン』の爲めにやられたり。詳しくはアデンに行きて英國官憲より聞合すべし』。

前途は已に暗黑となれり。我等はベンガル灣を通過せざるべからず。三隻の蒸汽船は何れの國のものにや、常陸丸の前に出でし熱田丸其中に含まれ居りはせずや。不幸にして日本より來航の日本船にはあらざるか。不安の念は更に我等の頭腦に宿れり。

アデンに着きしは、九月十八日、翌日事情を詳敷打合せする要ありし爲め、我等は翌くる日の正午まで該所に假停泊をなす。此處にて我等の知り得し事實左の如し。

『ベンガル灣に於ける遭難は公報にあらす。コロンボまでの航路は安全なり』

アラビア海は渺々として際限なく、アデンよりコロンボに至る約六晝夜、眼界雲と水の外に何物も目を遮ぎるもの無し。これより先き丁度コロンボ港に入る前約三晝夜船中の點燈悉く廢せらる。敵の目標とならんを恐れてなり。

五

九月二十五日午前八時、我當陸丸コロンボ港に入る。港内には捕獲せられし獨逸汽船數隻の外、列をなして淀泊せる汽船數十。我等に港に此汽船の雲集せる狀に照して航路の安全にあらざるを悟れり。

我等はベンガル灣の出來事に關して其詳細をしらんことを願へり。獨逸軍艦「エムデン」にやられしは三隻にあらずして六隻なりしなり。幸にも其中に我日本の汽船なしと聞き先づ胸を撫で下す。

船は豫定に從つて出港せんと傳へられ、更に又出港見合せとなる。我等の前途は既に暗黒となれり。揭示場には、朝には正午までは確かに出港せずと報せられ、正午には、午後七時までは出港せず。午後七時になれば明朝八時までは出港せずと報せられ。毎日同じことを相反復するに過ぎず。

船中は既に不安の氣にて充ちぬ。當局の語る處によれば、我等は何時までコロンボに滯在して航路の安全を待つべきかを知らず。都合よければ明日にも出港し得ん。惡く行けば恐ろしく長びくべし。』コロンボで何れお正月を……』などと言ひ出すものさへあり。人心惴々として、而かも前途に何等の知るべきものなし。

船長は三方に急報を發して航路の狀況を問ひ、或は其處置に關する打合せをなせり。三方とは、日本及び英國海軍當局これに加ふるに日本郵船會社長これなり。此三方よ

りの返報一致せずは、我常陸丸は斷じて錨を拔かずと。

船の事務員に聞けば本店の社長より出航し得べき返電來らば卽刻にも出航すべしと。果然返電は來れり。我等は遂に出港の運に逢へり。

水先案内は今にも來るべしとて我等は只管これを俟てり。既にして案内者は來れり。出港は幾分後るべしと言ひ殘したる儘飜然として去れり。我等は後に至りて悲慘なる出來事の爲めに出港の出來難き理由を知りたり。

六

悲慘の出來事とは何ぞ。數日前にコロンボを出でて西に向ひし四隻の蒸汽船はコロンボより稍遠からぬ處に於て、獨艦『エムデン』の爲めに捕へられ、全乘組員を其中の一隻に收めてコロンボに歸港せしめ、他の三隻は擊つて之を海に沈めたり。水先案内者はコロンボに歸港せし此船を迎へて既に其事情を知りたりしが爲めに單に出港の

後るゝを告げたる儘にして去りしなり。翌日の新聞には船長の遭難談として詳細に報道せられたり。

獨艦『エムデン』は急に武裝せる數隻の蒸汽船を從へ、變現出沒し敵國の蒸汽船を見附けて石炭と糧食とを奪ひ、然る後船を沈めて巧妙に行衞を晦ますなり。船艦の糧食は石炭なり。包圍監視の間にありては、石炭の積込すら容易の業にあらず。これが爲めに印度洋に於て十隻の蒸汽船を發見し、悉く石炭を奪ひたれば艦の糧食は當分裕とはなりたり。一說によれば印度洋にて沈めたるは三隻にあらず二隻なり。一隻は奪ひ取り石炭と糧食を滿載せしめて自ら之を從がへしむと。多分事實なるべし。

我常陸丸の航海少しく後れたらんには、或は共に遭難の厄に合しやも知るべからず。後に報あり。敵艦『エムデン』コロンボ沖に現はるると、船中に起る片談隻語も悉く人より人に傳へられ、前途の不安と憂慮に滿されたる乘各の過敏となれること言外に出づ。

七

二十九日午後二時朝帝國軍艦『ちくば』堂々として、コロンボ港に入る。聯合軍側の軍艦を見ること極めて稀なりし我等は、味方の軍艦に逢ふて心強き思を抱くこと當然なり、日本人ならざる乘客も聲を合せて萬歳を三呼す。『ちくば』の投錨と共に我等は我軍艦の既に匆皇として石炭の積込に忙はしきさまを目擊せり。

此夕船客なる邦人某、艦『ちくば』を訪ひ幹部の意を齎して船に歸り告げて曰く。『帝國軍艦『ちくば』は明朝我常陸丸を隨へて東に向つて出發せむ』と、衆勸呼して跳らん計りに喜ぶ。

同夜我常陸丸船長、『ちくば』艦長を船に招きて食を共にす。要は航路に關し主なる打合せをなさん爲めなるべしと察せらる、船長が何事を艦長と共に談じたるか、船長の外に誰一人知るものなし。

翌朝とはなりぬ。軍艦『ちくば』は堂々たる巨體を動かし始め、我常陸丸の後尾側を通過して沖に出で、折柄西より來れる英國の蒸汽船と信號を交へて後、漸進し、雲に其姿を沒し終んぬ。行衛は果して何處なるべき？初め我等は察せり。よし『ちくば』は、我常陸丸を護衛するとしても恐らくは雙者相前後して出港すべし。此間に恐らく時間の差あらんと。正午は來りぬ。我船は更に動く模樣無し。夕刻となる、依然たり。昨夜の喜びも今は既に水泡と化し去りぬ。後にて聞けば船長は既に出帆を斷行せんとしたりしも、英國官憲の許さざるに逢ひたる爲めなりと。我等の前途は更に暗黑を增すのみ。

八

これより先き日本より來れる蒸汽船『加茂丸』コロンボに入る。彼は急設の無線電信を有せり。我等は何故に此時彼が危險海を航し來りしやに怪しみたり。人あり傳ふ。

彼がペナンを去て西に向ふや、急報あり。前途危險なり、此爲めに他の船は路を轉じて後に向へり。然るに加茂丸の電信技手病の爲めに臥して急報を知るに至らず、平然として航海を續けたるなりと。果して斯くありしものか我等は確實なることを知らず。

同船は我等をコロンボに見殘して直に西行の筈なりしも、變事の起るに及んで亦港内に碇泊の止むなきに至れり。斯くてコロンボの港内は蒸汽船の爲めに餘地なきに至れり。

九

十月一日朝十時港内狹溢の爲めにとて港外に出でて碇泊するの止むなきに至り。列をなして港外に並ぶもの夕方までに二十餘隻を數ふるに至れり。

翌朝十時、急に英國官憲よりシンガポールまでの航路安全なるにより出帆すべしとの命に接す。命の傳はるとともに十數隻の船は相爭ふて東行す。而かも官憲は單に航路安全なりと言ひし外に何事も語らず、敵艦『エムデン』は果して何處にあるべき？我等は只徒に想像を逞ふして急いで次の港シンガポールに航行する外に途はなし。此ペルガン灣の横斷に要する日數約六晝夜。果して我等は此長き海上を何等の變事に逢はずして、シンガポールに入り得べきや。曩に官憲の保證によりて出帆したる蒸汽船すら、二度までも敵艦の發見に逢ひ、十隻と言ふ多數を奪はれたりと謂ふ折柄なれば、乘客の心も不安の雲にとざさるゝの思ありき。

乘客は我が常陸丸の出帆するに及びて何れも嬉色を呈せざるはなく、只算シンガポールまで早く無事で、無事で……と祈るのみ。

何等武裝を施されざる船が如何に大きければ迚、敵艦の前には何等の抵抗をもなし得ず。不幸にして敵艦に逢はゞ我等は海底に沈むの外に途なし。乘客は何れも過敏となりぬ。海上に船形現るれば直に望遠鏡をとつて其軍艦なるや商船なるやを見定るまでは安神出來ず。夕には點燈を消して闇より闇に航海を續けたり。

十

『軍艦見ゆ！』聲は何處よりか來れり、これ實に十月三日の朝七時、甲板は忽ち乘客にて滿ちぬ。夜着のまゝ飛び出でたるもあり。人心恟々たり。

軍艦の足は輕快なり。驀然として我常陸丸の腹側を衝くの觀を呈して直行し來れり。斯くて我が常陸丸の腹側に近くと共に艦首を轉じて我が船の後尾を廻り左側に現れ、我が船に平行して互に信號を交換せり。乘客はその英艦なりしを知るに及んで漸く安堵せり。乘客のうちには敵艦なりと見て衣服を着換ふる爲め己が客室（キャビン）に飛込みし人も少からずありしとぞ。

翌日は、海上、二三の蒸汽船を見たる外、軍艦らきしものを認めず。『軍艦に逢はなければ張合が無い』などゝ乘客の中に物語りする人等も見受けたり。果して然るか？

十一

果然！果然！『軍艦見ゆ』の聲を聽き始めたり。これ實に十月六日午前十一時後のことに係る。艦の進行せる方向は恰も我を追尾せるものゝ如し。午食濟みて後甲板に出づれば艦の姿は餘程近きぬ。艦體の巨大ならざることは凡そ想像されたり。乘客のうちには、三度此艦上より砲火の發せるを見たるものありと言ひ、我が船を追尾せることは疑なし。「敵艦にはあらずや』との聲は甲板上に充ちぬ。

艦體は煙の爲めに包まれて具さに見えず。猛烈に石炭を焚きつゝ驀然として我を追ひ來れることも今は既に明となりぬ。然れども軍艦としては其進行の度早からず。全力を盡くして我を追尾せることは疑なきも其速度十分ならず。此間に於ける乘客の不安言ふばかりなし。艦體の我船に追付く時間の長かりし丈け其不安の時も永かりしなり。船室（キャビン）にて既に換衣に着手せしものもありしと言ふ。

果然、我が常陸丸は停船を命ぜられたり。信號旗は上げられたり。常陸丸の全く停止するに及んで艦體は速に我船に近きぬ、甲板の一方には不安の念に滿ちし乘客群集して其船體を凝視す。船員にして叫ぶものあり。『我等の運命は今五分間にして定まるべし』と。外國人の乘客中には狽狼し初めたる人も見うけたり。

十二

艦尾に擧げられし軍艦旗は見えぬ、乘客は始めて安堵しぬ。佛の水雷艇なりしなり。常陸丸には既に國旗の飜へれるにも拘らず水雷艇は、携帶の「ボート」に兵を載せたり。「ボート」は今水上に降されんとす。信號は以前として交換されつゝあり。敵國船は他國の國旗を掲げて巧に他を欺くことをなしつゝある折柄なれば十分これを確證せんとする爲めなるべし。『日本の「キモノ」着たるは前方に出でゝ證據品とせよ』などと叫ぶものあり。此際萬歳を叫ぶこともよからんなどと言ふものあり。そこで、ワン、

トウー、トウリー！『バンザーイ、バンザーイ、バンザーイ！』

十三

艦隊乘組員の中には、帽を振り、半巾（ハンカチーフ）などを飜して之に呼應するものあり。下ろされんとせし端艇は斯くて其儘になりぬ。信號は濟みぬ。疑もなくなりぬ。水雷艇は方向を轉じて何處にか飛び行けり。

乘客は、『全く吃驚させられましたネ』と苦笑す、不安の胸に高調せし心臟の音は未だ舊に復せざるべし。『イヤもう軍艦には逢はぬ方が世話がなくて好い』と本音を吐くものあり。斯くて八日の朝我常陸丸は無事シンガポールの港内に入れり。

シンガポールを西に向けて出發すべき日本の蒸汽船吉林丸が五日間も碇泊せるは蓋し之が爲めなりと言ふ。我等は相互に顧みてよく無事に來りしを祝せり。苦熱甚だしく夜中

眠り成らず。

翌日常陸丸は豫定の如く朝八時シンガポールの港を出帆して香港に向け直行の途に着くことを得たり。乘客悉く喜色あり。

十四

船シンガポールを出でてより潭々として砥の如き海を走ること速なり。十一日朝、頻りに雨聲を聞く、凉氣の頓に到れるを感ず。

斯くて十四日朝十一時船香港に着す。往航の日座して全市を下瞰せし山頂は雲に隠れて見えず。急いで新紙を手にすれば、我軍は青島を衝きて將に敵の最終線に入らんとし、アントウアブは陷ちたりと傳へらる。

常陸丸は香港にて多くの積荷をなしたる爲め、出帆は豫定より後るゝこと約二十時間、遂に香港より愈神戸に向ふ、これ實に十六日朝六時なりとす。

十五

香港より神戸までの航行約五晝夜、凉氣日に增し、勇氣の加はれるを覺ゆ。名にし負ふ臺灣海峽も海波起らず、船よく走る。香港を出でてより、今まで主として英語にて記載されし揭示の類も日本語となりぬ。Mr. 某と記入されし邦人の乘客名も邦語にて某殿と示さるゝに至り、邦人も亦「サンキユー」「グッドモーニング」より、有難う、お早うに移りぬ。頻りに日本めきたる心地す。

我等の生命を托したる常陸丸は茲數時間にして神戸阜頭に入らんとす。コロンボに敵艦を避けて碇泊一週日に及びし爲め神戸着も亦豫定より一週後れぬ。時は維れ實に大正三年十月二十日。日將に海に沒せんとす。

何は兎もあれ幾度か不安の念に襲はれ乍ら、幸に禍害を避け無事故國の土を踏むことを得たるは何よりなりと、各人喜色自ら現る。芽出度

し、芽出度し。

外へ、外へ　終

大正三年十二月廿八日印刷
大正四年一月一日發行

定價金九拾錢

外へ・外へ

奥附

不許複製

著者　三田谷啓

發行者　河本龜之助
東京市麹町區平河町五丁目三十六番地

印刷者　河本俊三
東京市麹町區平河町五丁目三十六番地

印刷所　洛陽堂印刷所
東京市麹町區麹町二丁目九番地

發行所　洛陽堂
東京市麹町區平河町五丁目廿六番地
電話番町四二五八番
振替東京二〇九一四

洛陽堂出版書目

醫學博士永井潛著
▲生命論
定價貳圓五拾錢 送料拾六錢

高島平三郎著
▲教育に應用したる兒童研究
定價貳圓八拾錢 送料拾六錢

醫學士渡邊喜三著
▲遺傳之研究
定價壹圓五拾錢 送料拾貳錢

農學士山崎延吉著
▲農村教育論
定價壹圓五拾錢 送料拾六錢

法學士佐上信一著
▲地方自治の改善
定價壹圓貳拾錢 送料拾貳錢

栢岡徹譯
▲獨逸の國民生活
定價壹圓參拾錢 送料拾貳錢

山本瀧之助著
▲一日一善
定價五拾五錢 送料六錢

山本瀧之助編
▲一日一善日記
定價貳拾錢 送料四錢

天野藤男著
▲農村と娛樂
定價壹圓參拾錢 送料拾貳錢

天野藤男著
▲田園趣味
定價九拾五錢 送料八錢

天野藤男著
▲故鄉
定價六拾錢 送料六錢

花田仲之助著
▲報德實踐修養講話
定價五拾錢 送料六錢

▲高島平三郎著 心理學上より觀たる日蓮上人 定價壹圓六拾錢 送料拾六錢

▲日本兒童會編 兒童學綱要 定價壹圓八拾錢 送料拾六錢

▲高島平三郎著 家庭及家庭教育 定價九拾五錢 送料八錢

▲高島平三郎著 心理百話 定價六拾錢 送料四錢

▲高島平三郎著 女の心 定價四拾八錢 送料四錢

▲醫學士田結宗誠著 小兒の育てかた 定價五十錢 送料四錢

▲水野義三郎譯 一歲により廿一歲至る小供の生活 定價五十錢 送料四錢

▲高島平三郎著 現代の傾向と心的革命 定價八十錢 送料八錢

▲石川弘著 通俗孝子傳 定價六十錢 送料六錢

▲岡村準一著 兒童保護の新研究 定價貳圓貳十錢 送料十六錢

▲法學士中川望著 自治講話 優良村巡り 定價壹圓五十錢 送料十六錢

▲渡邊喜三著 人生二百年 定價壹圓貳十錢 送料十貳錢

▲石川弘著 田園生活 定價八十錢 送料八錢

東京市麹町區平河町 五丁目三十六番地 洛陽堂版 振替東京二〇九四番 電話番町二四五八番

360
24